

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520285
 研究課題名（和文） 杜甫の詩語に関する基盤的研究
 研究課題名（英文） Foundatioal Study on words in Tu Fu' s poetry
 研究代表者
 後藤 秋正（GOTO AKINOBU）
 北海道教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：60111184

研究成果の概要：中国文学のみならず我が国の文学にも多大な影響を与えた盛唐を代表する詩人である杜甫の用いた詩語の全体像を知るためには不可欠な『杜詩引得』（哈仏燕京学社特刊14, 1940。台北影印 1966）の不備を全面的に補訂して、2年間にわたる検討・補訂作業の成果を『杜詩引得』補訂 附『杜詩引得』詩題一覧（北海道教育大学札幌校漢文学研究室、2008）として一冊にまとめた。同時にこれをホームページ（「北海道教育大学札幌校漢文学研究室」）上に公開し、さらに杜詩研究には必須の「杜甫研究学刊（旧・「草堂）」の最近号までの総目次についても一覧を作成し、これもホームページ上に公開し、杜甫及び唐詩の研究者に提供した。

また、既存の索引類に加えて上記『杜詩引得』補訂』を活用しながら、まず定義があいまいな「詩語」という語自体に考察を加え、さらに用例こそ多くはないものの、逆にそのことによって杜詩の特質を示し、あるいは杜詩を読解するために分析が不可欠である語でありながら着目されることが少なかった杜甫の詩語、例えば「因人」、「渾渾」、「東西南北」といった語を抽出し、これらの語について先行用例と唐代の他詩人の用例とを比較し、具体的に分析して杜甫の詩の解釈に新たな見解を提出し、論文として発表することができた。これらは今後の杜甫の詩語研究の基盤となる成果である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学、文学論、唐詩、杜甫、詩語

1. 研究開始当初の背景

中国古典詩を精密に理解する上で、詩語を正確に理解することが重要であることは言をまたない。筆者は大学院時代には鈴木修次

氏が中国古典文学研究者のために主催していた「杜甫の会」に6年間にわたって参加し、杜甫の詩を精密に読み解くためには詩語の概念を正確に把握することが必要であるこ

とを強く感じていた。

詩語に関連する研究は、早くには清水茂『『白日』の解釈』（『吉川幸次郎退休記念中国文学論集』筑摩書房、1968）、鈴木修次「杜甫の詩における乱・歎・危」（『漢文学会会報』31、1972）、安東俊六「杜甫の『詩家』について」（『岐阜大学国語国文学』12、1976）、黒川洋一「杜詩『幽興』考—杜甫の自然観への手がかり」（『大阪大学研究集録』25、1977）、劉明華・夏秋瑾「杜詩“蕭蕭”解説」（『杜甫研究学刊』1998年1期）などの論考があり、前野直彬『風月無尽—中国の古典と詩人』、松浦友久『詩語の諸相—唐詩ノート』、向島成美『漢詩のことば』などの著述によっても手がけられていた。筆者もこの間、詩語への関心に基づいて、『『慷慨』の軌跡—曹植・嵇康・阮籍から陸機へ』（『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』、1979）、『『ぶどう・ぶどう酒』札記—漢魏晋南北朝期から宋代まで』（『北海道教育大学紀要』1部A、47-1、1996）、『『荔枝』札記—漢代から唐代まで』（『北海道教育大学紀要』1部A、48-1、1997）、『『清秋』札記 上・下』（『札幌国語研究』5・6、2000・2001）、及び『『窮途』補記』（『北海道教育大学紀要』53-1、2002）などの論考を発表した。そのほか、12人の研究者の協力を得て、松本肇氏と共同で編集した『詩語のイメージ—唐詩をよむために』（東方書店、2000）において、「江漢」と「窮途」の語を担当して論じたことがあり、詩語研究、特に詩語の含意を正確に把握することの重要性を一貫して認識していた。しかし、これらの研究は杜甫の詩語に言及されることはあっても、ほとんどが杜甫の詩語を中心に据えて詳細に論じたものではなく、さらには杜甫自身の使用の変遷にあまり着目されず、個別的で断片的な言及にとどまっていた。これらの状況を背景とし、杜詩の一字索引を整備した上で、これを基礎に据え、杜詩全体を視野に入れた詩語研究を新たに展開したいと考えたのが研究の動機となっている。

2. 研究の目的

(1) そもそも「詩語」という言葉自体が曖昧な定義のもとで使用されている。確かに「詩に用いられる言葉」であるには違いないのだが、この語はいつ頃から用いられ始めたのか、またいかなる様相のもとに詩中で用いられてきたのかを明らかにする必要がある。まず研究の前提としてこの点について解明する。

(2) 「蕭蕭」「滾滾」「烟花」などの語について部分的に行われていた杜甫の詩語に関する研究をいっそう精密で多面的なものとするためには、基礎的な資料・工具としての杜詩の厳密な一字索引が必要不可欠である。

その点では、『杜詩引得』が歴史的に果たしてきた役割は大きい。しかし、『杜詩引得』は欠陥も併せ持っている。特にこの『引得』が恣意的（例えば、「東」の項では、「東南」の語は別に掲出されているが、「東西」の語は別に掲出されていないなどの不備がある）に掲出している熟語（『合成詞』）部分の妥当性について徹底的に補訂し、欠落している箇所についてはこれを補い、連続して用いられている語に留意しながら、新たに掲出しなおす。

(3) さらに上述した検討作業を通じて得られた知見を利用しつつ、すでに一字索引が完備している『文選』などの総集の索引や唐代における他の詩人の索引、必要に応じては電子テキスト類をも効率的に活用し、杜甫の詩語の使用状況と比較・考察することによって、杜詩に特徴的な詩語を抽出することを容易にし、杜甫の詩語使用の実態把握の上にならって、その様相を全体的・数量的に把握する。またこの作業を通じて、杜甫がどのような先行用例を念頭に置いているか、あるいはそれが杜甫独自の発想になるものであるかなどについて、杜詩の注釈書類などの関連文献を整理しながら明らかにする。またその上で、杜甫の詩語がいかなる具体的な相貌のもとに用いられており、いかなる特質を有するのか、一端を明らかにし、今後のさらなる研究を進展させるための基盤を構築する。

(4) (3) で得られた成果については、『杜詩引得』を修正した『『杜詩引得』補訂』についてはこれを刊行し、併せてホームページ上に公開することによって、研究者・研究機関に送付・提供し、全体として我が国における杜甫の詩語についての研究の促進をはかる。

3. 研究の方法

『杜詩引得』（哈仏燕京学社特刊 14,1940。台北影印 1966）が恣意的に掲出している詩語の部分をも全面的かつ批判的に検証し、これを精密に補訂する。ここで得られた杜甫の詩語使用の全体的な傾向を俯瞰したうえで、すでに索引類がCD-ROM化された電子テキストや刊行物として公開されている『先秦漢魏晋南北朝詩』、『文選』、『玉台新詠』、『全唐文』、『唐代四大類書』、『歴代賦彙』などを検索して得られた詩語の用例と杜甫のそれとを比較・分析し、杜詩に特徴的な詩語について、特に歴史的な含意の推移に着目した具体的な分析を試みる。また、日本国内だけではなく中国における杜甫研究も視野に入れる必要性から、杜甫に関して中国における杜甫研究を代表する学術専門誌である「杜甫研究学刊（旧・「草堂」）」の総目次を一覧にし、研究の効率性の向上をはかる。

4. 研究成果

(1) 杜甫がその詩において、どのように詩語を使用しているのか、その全体像を把握するために、基礎的で不可欠な作業として杜詩の一字索引である『杜詩引得』(哈仏燕京学社特刊 14, 1940。台北影印 1966)を全面的に再吟味し、特に本文とは別に掲出してある語彙の部分について全面的な見直しと検討を行ってこれを補訂した。また、単なる補訂にとどめることなく、関連する語、例えば「蔵身」であれば「蔵其身」という用例があることも示し、「群凶」であれば「群兇」も示すようにして関連する表現をも容易に参照できるように配慮した。これらの作業の中間報告を、『杜詩引得』補記(I)～(IV)('北海道教育大学紀要'人文科学・社会科学編、58-1～59-2, 2007～2009)と題して発表した。これをさらに厳密に校訂し、『杜詩引得』補訂として一冊にまとめた。これはホームページ([その他]の項目を参照)上に掲載して、閲覧に供している。今後の杜詩研究にとって必要不可欠の工具書となるものであり、すでに送付した杜甫・唐詩研究者からは、「特に助字の使用について、杜甫の詩に一定の言葉の結びつきがあることがわかり、驚いている。例えば「如」は、杜詩引得では、「如今」「如意舞」「如何」を掲出するのみだが、補訂では「如何」の用例を補うばかりでなく、「如有神」以下 41 語を見出しとしている。これは杜甫の詩語の用い方の傾向を示している。……杜詩引得からはこれが見えてこない。」、あるいは「詩語のみならず唐代の語彙や語構成の研究に対しても大きな示唆を与える。」といった感想が寄せられている。

(2) 上記の作業によって完成した『杜詩引得』補訂の知見から導かれた詩語のいくつかを選び考察を加えた。

① 詩語研究の総論に相当する『詩語』という語についてにおいて、この語が南北朝末期までには見出せず、中唐の張籍の詩「左司元郎中の秋居に和す十首」(其四)に至って初めて用いられること、その後、貫休の詩「江西にて再び周璉に逢う」にも用例が見られ、宋詩には頻繁に用いられるようになることから、中唐時期に詩語に関する注目意識が高まったことを明らかにした。

② 個別の杜甫の詩語使用の特徴の研究については以下の論考を発表した。第一に、華州での官職を捨てて放浪の旅に出た杜甫が「秦州雜詩二十首」(其一)で用いた「因人」の語について分析した「杜詩『因人』考」を公表し、杜甫の「因人」には他人の行為を原因としてという意味では用いられず、これが主として他人に頼って、他人の助力を得てという意味で用いられていることを解明し、杜詩

の新たな理解を導いた。また第二に、杜詩には一例しか見られないものの、杜詩の特質と関わるものでありながら解釈に定説が見られずに今日に至っている「渾渾」の語について、「杜詩『渾渾』詩解」を公表し、この語は岩石の形状が丸くなっていることや大きいことを表すものではなく、暗くて視界がきかないさまを表し、杜甫の不安定な心境の象徴ともなっていることを明らかにした。

さらに、放浪の後半生を送った杜甫の人生を象徴する語である「東西南北の人」については、『東西南北の人』について一杜甫と高適の酬和詩を中心として一と題する論考を「中国文化」に投稿して掲載が決定しており、さらには、杜甫の人生観と密接に関わる「独立」の語について、李白詩との比較を試みることによって明らかにする「李白の『独立』と杜甫の『独立』」(未発表)、人口に膾炙した詩でありながら、国都長安を指すのか、国家ないしは国家機構を指すのかについて解釈がほぼ二分されている「春望」の「国」について、他の唐詩から分析を試みた「杜甫『春望』の『国』について」(未発表)といった論考をとりまとめている。これらはいずれも今回の研究の成果を踏まえて執筆されており、今後の杜詩における詩語研究の一環をなすものであって、将来的には、杜甫研究者の協力を得ながら杜甫の詩語研究を総合して『杜甫詩語研究』(仮称)を企画・出版するに際しては、その一端を担うものとなる成果である。

③ 杜甫に関する研究を専門的に発表している杜甫の文学を研究するためには参照すべき論文が毎号多数掲載されていて、杜甫研究には不可欠である中国の定期学術刊行物「杜甫研究学刊」(四川省杜甫学会・成都杜甫草堂博物館)については、すでにホームページ上に掲載済みの創刊号から 2003 年第 2 期までの号に加えて、2003 年第 3 期から最新号(2008 年第 4 期—総第 98 期)までの目次を一覧にしてホームページ上に公開し、唐詩・杜甫研究者が通覧できるようにした。この一覧も杜甫・唐詩研究者にとって必須のものであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 後藤秋正「『東西南北の人』について一杜甫と高適の酬和詩を中心として一」(中国文化学会「中国文化—研究と教育—」67、p58-p71、2009、査読有(校正中))
- ② 後藤秋正「杜詩『渾渾』詩解」(北海道教

育大学語学文学会「語学文学」47) p17-p26、2009、査読無

- ③ 後藤秋正「『詩語』という語について」(北海道教育大学国語国文学会・札幌「札幌国語研究」13) p1-p10、2008、査読無
- ④ 後藤秋正「杜詩『因人』考」(中国文化学会「中国文化—研究と教育—」66、p55-p66、2008、査読有)

〔図書〕(計1件)

- ① 後藤秋正、樋口敏也、溝淵由希「『杜詩引得』補訂、附『杜詩引得』詩題一覧」(北海道教育大学札幌校漢文学研究室、100部刊行) 180p、2008

〔その他〕

ホームページ(「北海道教育大学札幌校漢文学研究室」)

「『杜詩引得』補訂」、「杜甫研究学刊」(旧・「草堂」)の最新刊に至るまでの全目次などを掲載している。

<http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/~gotoa/menu.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 秋正 (GOTO AKINOBU)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 6 0 1 1 1 1 8 4

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者